開新実学事始め　２

小倉紀蔵京都大学教授が『韓国の行動原理』（ＰＨＰ新書）を上梓された。日本にとって一番重要な隣国である韓国について、小倉教授は専門家としての知見を傾けて多角的に論じられ、日本と韓国・韓半島との思想的実践的紐帯役を果たそうとしておられると私は受け止めた。そこで私は、フェイスブック上で日韓・韓日の相互理解と開新への一助となればと、同書を基軸とした対話を呼びかけた。私の呼びかけに快く賛同され、韓日に関する広闊な知識や哲学的深みから対話をリードしてくださったのが金泰昌先生（東京大学出版会刊『公共哲学』全２０巻の編者）である。

韓半島と日本列島とは古代から太い紐帯があり、非常に密接な交流史があった。中国大陸からは７世紀、聖徳太子（572～622 年）の時代以来、文化的恩恵を受けるようになったが、聖徳太子その人が最も大きな思想哲学的薫陶を受けた師僧が高句麗の慧慈であったと思われる。日本列島に住む人々は、韓半島との奥深い文化的関係史を抜きにしては、自らの立ち位置を見定めることが困難である、とは言えないだろうか。

現在、日韓・韓日関係は疎遠の度を強めているように見えるがそれは表層的な動きなのであって、パラダイムシフトという世界史の大流に思いを致すと、日本と韓国とが今ほど新たな紐帯を結び始めるに適したタイミングはないのではないか。同書を読んで、改めてそう思った。

フェイスブック対話の後、大橋健二氏と北島義信氏にも『韓国の行動原理』への感想をお書き頂き、同書の出版を一層意義付けてくださったのは嬉しい限りである。お二方に深く感謝申し上げます。以下はフェイスブック上の金先生らとの対話記録の大要と大橋、北島両氏の感想文である。（山本恭司）

山本恭司

『韓国の行動原理』の第一章に「韓国社会では反道徳的行為への生理的嫌悪がもっとも強いのに対して、日本社会では反遵法的行為への生理的嫌悪がもっとも強い」という指摘がありました。「悪法も法なり」（ソクラテス）の遵法精神と、道義の実現を（幕府）法の上に置いた赤穂義士。「法」と「道徳」に関わる議論を、同書を基軸として進めていければと思います。

金泰昌

小倉教授の著作はいつもわたくしには自己省察の為の善き刺激剤でありました。今回も先ず"日本では法が重視され韓国では道徳が重視される"とか "日本社会では反遵法的行為への生理的嫌悪がもっとも強いのに対して韓国社会では反道徳的行為への生理的嫌悪がもっとも強い"と言う比較指摘から、わたくし自身を含めて普通の韓国人の法と道徳に関する認識と理解の現状を改めて考えて見ました。

韓国人は一般的に "法"（の正当性）に対する信頼感が日本人よりは低いし浅いと言えるでしょう。それは法とは所詮権力者の権力意志の反映に過ぎないという法認識が根強いからではないかと思われます。現在も司法機関は政権与党の手先に過ぎないという不信感が

遵法精神の成熟を妨げているわけです。そして権力者-政権与党に対抗する立場から頼りになるのは権力側に密着した法よりは国民感情に訴えやすい道徳を権力批判の武器にするのが効果的であるという経験則が働いているといえるでしょう。韓国でよく耳にする言い方では 実定法の上に憲法があり憲法の上に国民感情法がある、そして司法不信の表現として無銭有罪 有銭無罪という言い方がありましたが最近の流行り言葉は "ネロナムブル＝自分（の党派）がやればロマンス=適法で他人（の党派）がやれば不倫＝不法" というのが社会全体に拡がっていると言う現実に心痛むのです。韓国の庶民の法感覚と法認識の熟成が次の政権の優先課題になることを期待するのです。

・

武田康弘

山本恭司さま

「悪法も法なり」（ソクラテス）の遵法精神というのは、嘘です。そういう思想でないのは、「ソクラテスの弁明」「パイドン」に明白です。毒杯を飲んだのは、内面的真実を陪審員制度の判断の上に位置付けていたためです。悪法でも法には従うというのは、ソクラテスの思想と行為を矮小化させるもので、不味いと思います。

・

山本恭司

武田康弘様。ご指摘ありがとうございます。弁明とパイドンの読み込みが浅かったと反省しています。とても重要なご指摘をいただき感謝しています。

金泰昌

互いに補い合う対話こそ真の対話であるというわたくし自身の熱い思いが活かされて嬉しいです。小倉教授が直接言及したのではないので敢えて何も言わなかったのですが、武田さんのご指摘もありましたので一言申しますと、韓国では悪法も法だから遵守するべきだと言う人は会った覚えがありませんね。法自体への信頼度が低い所でそのような発想は出にくいのです。韓国の元ソウル大学の法哲学専門の老教授から聞いたことですが１９３０年代の京城大学で教えを受けた尾高朝雄（1899-1956:京城大 そして東京大教授）が〈法哲学〉という著書のなかでソクラテスと絡めて言及したのが間違って伝わり特に日本で流行り言葉になったということでした。その法哲学者によれば、ソクラテスがそういうことを明言したという文献証拠は何処にもない。恐らく古代ローマの法学者 Ulpianus の言葉として後でラテン語の法諺になって伝わる"Dura lex, sed lex（=The law is the harsh, but it is the law=法は過酷であるが、それも法である）を日本語に意訳する時に悪法も法という風に成ったのではないかと推測してました。

・

山本恭司

とても勉強になります。民の行動を不当に制限する掟（法）に対しては、それを破って正義を貫く行為は讃えられてしかるべきです。悪法は善法に変えるべく、気づいた人が連帯する能動性（勇気）が、特に日本人には必要であると私は常々考えていました。そこは韓国の人たちから謙虚に学びたいと思います。

・

金泰昌
小倉教授の言い方では "法の道徳化"という問題意識、そして世界的推勢としての "移行期的正義"のことにもキチンと配慮しています。わたくし自身の観点からは "回復的正義"を実現する方向からの法制度の抜本的改革を熟慮する必要性があると思うのです。そこで当分間、韓日相互の法認識の再調整に於ける産みの苦しみの期間が長引く可能性があります。またグリーバンス国家として自国の位置付けを明確化することをつうじて過去の欧米及び日本による帝国主義時代の遺産である'悪法'や '悪条約'にこれ以上拘束される必要はないし逆に徹底的に変えて行くべきだという法意識が強まるのではないでしょうか? 小倉教授はそこ迄も見通しているわけです。うるさい隣国との関係断絶だけが得策でないことを強調しています。

山本恭司
日本人が「法」を金科玉条の如く遵守する傾向があるのは、封建時代の「自治」農民の間で、“破ることはまかりならぬ”とされてきた「村の掟」の延長上に近代以後の「法」を位置づけてきたためで、それに対して韓国人は「道徳」を「法」の上に置いている。李王朝時代以来「自治」のなかった韓国では、法を日本人にとっての掟のような侵すべからざる遵守対象とは見ていない。むしろ士大夫のメンタリティがそうであったように、解放後の韓国人は常時、時の最高権力者に対して道徳的正しさを求めています。明治政府誕生後の日本国民の意識は、嘗ての「掟」が「法」に成り代わっただけで、日本では悪法への糾弾や改法への市民運動が起こりにくい。日本人がこのような羊然としたおとなしい没主体性のままでは、日本社会は衰退の一途と危惧します。そこで見習うべきは、お隣韓国のダイナミックな市民運動ではないでしょうか。小倉教授の同書の第二章を、私はそのように読みました。

金泰昌
第二章は韓国と日本に於ける "市民像"の違いに関するわたくし自身の個人的見解との対比が今後の思考展開に意義深い参考になりました。わたくしは２０年以上続けた公共する哲学対話を通じて体感・体験・体得した現代日本に於ける代表的な市民の有り様は "生活者市民=生民"であり、韓国のそれは "政治志向の強い市民=志民"であると考えたのです。佐伯啓思教授が京都フォーラムに参加した時 "市民"ではなく "士民"という言葉を好むと言ったことが思い浮かびます。士農工商の士との同一化というかサムライ的市民像というかとにかく市民という言葉には好意的でありませんでした。そして２０１５年に韓国に戻り東洋日報社の企画事業として始めた東洋フォーラムの主旨を"哲学する市民=哲民"主導の社会開新対話運動と意味付けたことにも関連します。わたくしが"哲民"と名付けたのがある意味では小倉教授が指摘した "士大夫的市民"と互いに通底する所があるかも知れません。
　小倉教授の指摘に接するまでは正直に言って "士大夫的エリート"とか "朱子学的メンタリティー"という概念語を使って韓国知識人論-社会論を展開するという意識が無かったので良い刺激を受けたのです。わたくし自身幼い時から厳格な朱子学者祖父の訓育の下で育ったのでその影響が体と心に深く染み込んでいると同時に他方祖父への反発もあっ

て複雑な心境です。ですから逆に朱子学的な物事からの脱出を計るという心理が働いていた所で小倉教授の朱子学的韓国-日本論に接するというのは殆ど無意識の奥底に閉じ込めていた純粋経験が改めて喚起されたと言えます。第二章はその前に読んだ小倉教授の多数の著作からの刺激を再度深感する切っ掛けになりました。

山本恭司

第三章の「東学と北学」で小倉教授は、韓国の近代化の原動力について問いを発しています。李氏朝鮮 500 年の歴史は、地続きの中国の歴代王朝（明→清）との関係で、儒教文化が爛熟した明を大中華と敬慕し、朝鮮を「小中華」であると自負していました。明を滅ぼした野蛮な清からは学ぶべき何物もないというのが李朝の貴族階級・両班（やんばん）の主流派の考えでした。この老論派に対して、北の清や島国の日本からも学び、採り入れるべき合理的発想や生活の知恵がたくさんあると主張した北学派や実学派は主流派から斥けられてきました。いわば道徳（＝朱子学）原理主義です。

市民（志民）の蹶起で民主化を勝ち取り、資本主義を活用して先進国の仲間入りを果たした韓国が近年、“日本からは学ぶべきものは何もない”とばかりに反日に傾き、これからは「ポストモダン」（脱近代）だとしてプレモダン（李王朝の再評価）に回帰しようとしているかのようだと小倉教授は指摘しておられると私は読みました。その辺りの議論について金泰昌先生のお考えをお聞かせいただけますか。

・

金泰昌

第三章は今回様々な困難を克服しながら日本に帰って来たわたくし自身の問題意識を前もって日本人韓国専門家が見通して高見を述べて頂いたような内容になっています。何故急に実学批判が旺盛になり東学が反日性を強めるのか?　日本の韓国研究者たちはこのような事態の進展をどう見ているのか?　直接意見交換をして確かめたいという思いがあったからです。小倉教授の卓見では社会経済的適実性を目指す実学的市民意識と道徳(感情)的正当性への執着が強い東学的市民精神とが織り成す二重性を東学主導で一本化するには反日という感情エネルギーの動力化が経験的に有効であると思うからではないかという気がするのです。実学的市民意識は相対的に反日性(或いは反清性)が希薄だから標的にしやすいところがあると言えます。小倉教授がその通りに言ったのではないけれどそのように読めたのです。わたくし自身はポストモダンであれプレモダンもしくはモダンのどの時代状況であれ東学=反日という"反"思想-哲学に規定 確定 限定された東学では真の開闢力をもち得ずただの破壊の思想-哲学になってしまうことを憂慮するのです。是非とも反感をテコにするネガティブエネルギーではなく共感を育むポジティブエネルギーになることを東学に期待するのです。今暫く東学自体の自己開闢が必要ではないかというのが第三章を読みながら実感したことです。

もしも東学が韓民族固有の産み出した世界開闢の思想-哲学-宗教に成ることをめざすなら、"反"ではなく"ハン"の思想-哲学-宗教であって欲しいのです。"ハン"とは韓民族固有の原意識を表す鍵言葉です。漢字表記では韓、汗、檀等々いろんな文字が遣われていますがそれらは何処までも方便に過ぎません。重要なのはその意味で、一、多、中、大、開、明、凡(非決定 不確定)と解読されています。天符経というハン思想-哲学の原資料に"人

中天地一"という文言があります。その意味は人間こそが天と地との間から両方を一に結び繋ぎ生かすということです。ここで一にするというのが単に一元化だけではなく多元化、中心化、拡大化、開新化、開明化、など多様な働きとして現れているけれど決してどちらかに決定-確定-限定されてしまうことはないというのです。要は新羅時代の大学者チェチウオン（崔致遠）の "接化群生"という一言で要約出来ると思うのです。"ハン"思想-哲学の核心に繋がりそれを時代と状況の要請に生かし直すことこそが東学の真と実の意味に於ける韓国化と同時に地球化を成し遂げることに成るのではないかと祈願する次第です。

反日ではなく韓国と日本とのあいだ・あわい・まじりあいから韓国も日本も抜本的に変化し、それが地球と人類の新たな生存・活命・共福への道開きに成ることを目指すのがより相応しいと思います。如何でしょうか?

山本恭司

ありがとうございます。拳々服膺いたします。

山本恭司

次に行きます。第四章は「韓国人と日本人の政治観」です。日本型の政治文化よりも朝鮮型のほうがより「正統的な東アジア型」であって、日本はそれから遠い特殊型であるという指摘です。そして、日本の政治や社会の変化を、日本一国の文脈や欧米との比較という文脈だけでなく、韓国との比較という文脈で捉えてみれば、かなり明確な分析が可能である、と結んでいます。小倉教授の凝縮した表現を一見読んだだけでは意味がなかなか掴めませんが、「儒教化」（朱子学化）というキーワードで東アジアの文化資源に言及し、明治以後の日本が現在、儒教化する過程にあるとしています。ここで言う「儒教」とは、丸山真男の言う儒教（頑迷で静態的な封建的メンタリティ）のことでも、教育勅語を草した元田永孚三らのいわゆる“堯舜の治世”でもない。普遍的な「理」によるガバナンスのことだと小倉教授は言っているのではないかと受け止めました。凝縮した文章なので、読み解くのに苦労しましたが、角度を変えていうと、万世一系の「天皇」を儒教道徳の最高体認者と一致させたのが明治以降の近代日本であって、今の日本政治の底流は、本来の意味の儒教的「理」の政治、そのダイナミックな動態的政治原理の形成過程にあるというものです。韓半島や中国大陸の儒教（老荘も含めてもよい）等の東アジア的規範を鏡にして写して見れば、今の日本政治の混沌は、朱子－李退渓－横井小楠と受け継がれてきた朱子学の現代的再生・飛躍への過程と見ることも出来るというふうに読みました。
金泰昌先生が提示された「ハン」はそうした東洋的思想哲学と親和性があるのではないでしょうか。それは人間生命への照射であり、従来の西洋哲学の枠組みを包含する希望です。「包含」というと西洋をひとくくりにまとめて呑み込んでしまうようなある種の傲慢の響きがあります。西洋哲学の枠組みの中では決して主流になり得なかった徳の体認の実践哲学とでも言っておきたいと思います。

金泰昌

第四章を読みながらわたくしが自己省察したことは普通の韓国人の行動様式を見る限り

自己管理-統制よりは他者管理-統制を優先させるという傾向とその不当矛盾に対する無感覚という二重の問題です。自由民主主義を基軸にした政治体制を憲法の旗印に掲げた以上、権力側の介入を拒否する自己管理-統制の可能な生活世界が保障されるべきなのにそういう原理的なことを重視せず多様なかたちの他者管理-統制への衝動を抑制する仕組みが十分作動しないというのが又大きな難題であります。言い方を変えれば、韓国人の過剰な政治志向でありその適切な抑制策を自主的に産み出すことです。

山本恭司

第五章に移ります。アメリカが国連を巻き込んで始めたイラク戦争への日韓両国の派兵について、小倉教授は「間違った戦争への加担についてその後記憶を消し去るかのように議論をしなくなってしまった日本の状況は、むしろかなり殆いと思う」と指摘しています。韓国はどうかというと、政界も言論界も「国益」を真っ正面から論じ、反米で出発した盧武鉉政権ですらイラク戦争派兵へと梶を切り直したリアリズムは説得力があります。対して日本は、例えば有力なオピニオンリーダーだった岡本行夫氏が、国際社会における「象徴的意味」という曖昧な言葉を並べて“米国にとっての意味即ち利益”に追従し、「日本にとっての利益」についての生々しい説明が圧倒的に欠如していた、と小倉教授は指摘しています。当時喧伝された「イラクの大量破壊兵器保有」が作り話だったことが戦後に暴露されたのに伴い、米英の戦争時の国家元首らは自らの判断が誤りだったことを認め（反省の弁を述べ）ました。最低限の良心の発露です。しかしアメリカの言い分を鵜呑みにして自衛隊を戦地に派遣した小泉自民党総裁（首相）も与党公明党も、現状の誤認にもとづくイラク戦争加担の責任については頬被りしたまま今に至っています。日本の汚点です。済んだことに知らんぷりを決め込む“ダチョウの逃避”ぶりは腹立たしい思いです。日本政治がアメリカ一辺倒で、隣国韓国のリアリズムを見ず、逆に韓国に対する根拠の無い優越感に浸りきることで心理的平衡を保とうとしているかのような今の日本のメンタリティは本当に危ういと思います。
聖徳太子が活躍した 6 世紀後半から 7 世紀前半にかけての日本は、半島の高句麗・新羅・百済をしっかりと見据えていました。韓（朝鮮）半島の三国も、日本と中国の動向を見据えながら能動的に、国と国民の生き残りをかけた近隣外交を行っていました。日本が連合国に全面降伏敗戦したからとは言え、70 年以上後の今もアメリカ一国と歩調を合わせることしか考えていない現状は異常です。先ず、日本が国政レベルでも民間レベルでも、隣国・韓国と手を携えることこそが望まれます。「分断して統治せよ」のローマ以来の西洋の統治方程式に乗せられたままでは、日本と韓国は共倒れになりかねません。「現在、日本がアジアで手を組むことのできる相手は韓国しかありえない」という小倉教授の結語に共感しました。

金泰昌

第五章を読みながら感じたことは次の二点です。第一点は基本的にアメリカを媒介軸とする'擬似同盟関係'であるとした上で韓国と日本とのそれなりのバランスの取れた韓日間国益接近の最適化を実現出来るのは両国のどの集団であるかということです。わたくし自身が身を大学におきながら政府と企業と軍隊と教会と接してみて体感・体験・体得したことは先ず企業、そして根本主義に片寄らなければ教会、敵対関係でない場合の軍隊の順であり政府（特に権力維持及びその強化を専ら国民感情にうったえることによって計ろうとする場合）が最も

困難であります。
そして第二点ですがわたくし自身が経験上期待と希望を掛けられのはより良き韓日関係を相互の開新活命への道開きに向けて方向転換を目指す市民、志民・哲民であります。彼ら彼女らと共にする民間主導の対話活動の継続的発展的共同実践であるという意気込みを精一杯生かして参りました。ただただ尽人事待天命(=人の出来る事をやれるところまでやって後は天心=民心の成り行きを待つ)であります。わたくし自身は反日即愛国ではなく知日こそが真の愛国への道であるという立場と観点を一貫して堅持してきた理由もより良き韓日関係こそがより望ましい東アジアは勿論地球と人類の未来共創にも貢献すると思うからです。

山本恭司

日本史で言えば応神ー仁徳天皇のあたりに日本列島と韓半島の人的、思想的脈絡があり、中臣（藤原）鎌足が日本と韓半島を繋ぐ結節点になっているというのが私の目下の見立てですが、そのことは後日論じるとして、要するに韓半島と日本列島とは輻輳的に繋がり・絡み合っているのです。そこに目を向ければ、東アジアの日韓・韓日から見える世界の景色が一変するのではないかと思っています。
金泰昌先生の指摘された教訓、すなわち反日愛国ではなく知日愛国との対比で、日本人に私が教訓として言いたいのは、嫌韓自尊ではなく知韓開新です。韓半島には崔致遠、崔漢綺、李退渓ほか、偉大な思想家・哲学者がいます。日本列島には新井奥邃、安藤昌益、熊沢蕃山ほか、偉大な思想家・哲学者がいます。これらの思想的人的資源は西欧の哲学の巨人達と比べて遜色がありません。というより、日韓・韓日の思想哲学の巨人たちの叡智を総動員すれば、文明の大転換が可能です。地球の救済、人類の共福実現が可能です。我々は過去を知ることで憎しみや怨みに凝り固まるのではなく、歴史から教訓を得るべきです。「歴史にイフはない」という言葉には、人は過去よりも未来に向けて歩を進めよという叡智があります。「存在するものは全て合理的なり」とも言えるのです。
我々が過去を解明するのは、互いに相手側の非や過ちを攻撃し合って、互いに己高し・己正義なりを言い募りあい、互いに嘲笑い・嘲笑われ、軽んじ・軽んじられあうためではなく、互いに相手を尊敬することを学ぶためなのです。金先生がおっしゃる「志民」「哲民」とは、それを実践する人々のことではないかと思っています。自身が他の何者かを裁く資格があると思うのが傲慢です。最初から大勢の志民・哲民がいるわけではありませんが、「接化群生」のギアーが噛み合えば、半島・列島から未来共創が始まるでしょう。

金泰昌

日本滞在中から帰国後にも李退渓研究会にも積極的主導的に関わって参りましたが最近韓日関係の改善問題を主題にする対話活動を主宰するなかで李退渓への関心が薄れソキョンドク（徐敬徳：1489～1546 朝鮮王朝中期の気学者.気一元論者）、イムソンジュ（任聖周 1711ー1788 忠清北道出身生気論者）、特にバクジェカ（朴斉家：1750ー1815 北学者. "北学義"の著者 所謂北人派実学の代表格）という人物たちに注目するようになりました。おいおい皆様との対話の中でそういう人々のことも話題にしていきたいと思っています。物事の真理よりは生命開新の真実真相を究明することに全力投入したからです。今後の韓日関係は体制の共有よりは開新活命の道開きの方向への根本転換が時代と状況の至上命令ではないかと思

うからです。
　わたくし自身の問題関心は李退溪から朴斉家へシフトしましたし.理とか道の学から気と生の学へ移動したわけです。
　崔漢綺も崔斎愚もこの人々と同じ思脈から出たといえます。
　言い方をかえますと李退溪、李栗谷中心から朴斉家-崔漢綺-崔斎愚-孫秉熙へと着眼点を変えたということです。同じく忠清北道に深い縁がある宋時烈（朝鮮性理学-朱子学の大御所）よりは孫秉熙に注目するようになったということでもあります。
　このような関心転換の意味についてはおいおい今後の哲話を通じて解明する積もりです。

山本恭司

第六章は「北朝鮮というファクター」です。日本の敗戦で満州から子どもを連れて命からがら朝鮮半島を南下して日本への帰国を果たした藤原ていさんの体験記『流れる星は生きている』を読み、日本の敗戦からそんなに日を置かない段階なのに既に「38 度線」が帰国の成否を分ける分水嶺になっていたことを知りました。私は板門店から北の方角を眺めたことがあります。同行した韓国の新聞社の方の夫人が「南北統一」を心底から願っている胸の内を話してくれました。誰が良い悪いではなく、かつて一つの国だった韓半島が真っ二つに分断され、敵対しあっている現実に、私は韓（朝鮮）半島はいつか一つの国になって欲しい、そして日本と友好交流する関係になって欲しいと心から思いました。体制は天と地ほどの違いがあっても、同じ民族の同胞として共に仲良く暮らせるように。北に住む人も、南に住む人も、同じ善良な「人間」であり「生活者」なのですから。
私の思いはナンセンスなのかもしれません。小倉教授は、「日本は、『価値観が違うからつきあえない』という線の細い議論のみに時間を費やさず、日本こそが東アジアの新しい秩序づくりを主導するのだ、という豪胆な気構えで朝鮮半島情勢に臨まなければならない」と書いておられ、私は「よくも言って下さった」と読みました。今まさに激動の世界史の中で、東アジアの我々は生き残りと開新をかけた叡智の結集が求められています。
政治的な事柄に関して私は十分な知識も論じる能力もありません。ただ、韓国と北朝鮮と日本の三者が共に手を携えられるようになって欲しい、いや必ずなれる筈だというのが私の確信です。「日韓モデル」（小倉教授の命名）が足りなかった部分を補って新たな日朝モデルをつくりあげる、というぐらいの計画を立てるべきなのだという小倉教授の要請には惹かれます。その共通基盤となるのが、東アジアの未来を開く開新実学だと思っています。その中身を急ぎ共創していきたいのです。

金泰昌

第六章を読んだ後山本さんのご感想を拝読させて頂きました。とても慎重で未来共創的な深読みであると思いました。そこでわたくし自身の感得したことを述べてみます。先ず “いまの韓国人のメンタリティーとしては北朝鮮に対抗できる心理的な力はほとんどない” そして続いて“韓国人のメンタリティーからいえば、北朝鮮の方に国家の正統性があるのではないかということにつながってしまいかねない”(韓国の歴代保守政権の自主性欠如と対日妥協を根拠にして)というご指摘を素直に受容しながら韓国のなかで明らかにしたわたくし自身の所見を述べさせていただきます。

1。小倉教授の韓国人のメンタリティーというのは特にムン（文在寅）政権下で以前にまして目立つようになったというのが私見です。
2。それとの関連で言ってきたことですが韓半島の統一方案として二つのモデルを提示しています。一つは軍事力もしくは核武力モデル、もう一つは経済力もしくは生活力モデルです。前者はベトナムモデル、後者はドイツモデルともいえます。戦闘意欲がないというのはあえて戦争までする必要がないということです。適時適所の安保管理体制を整理確認しながら経済力とそれにもとずいた生活力を高めて行けばそのトリプルダウン効果の蓄積による力動の働きによっていつか統一が実現するというシナリオです。安保管理というのは健全確固たる韓米日安保体制によって北朝鮮単独もしくは北中・北露どちらかの挑発がもたらすリスク費用が予想を遥かに超えるというのが抑止力として働くということです。金正恩も自分の身体的政治的安全確保を犠牲にしてまで戦争を仕掛ける冒険は避けるでしょう。
3。国家の正統性に関しては韓半島に於ける唯一正統なのは大韓民国であるという確信が常識であったのがムン政権下でかなり変質したわけです。大韓民国の国家としての成立と存続発展を否定する言動と教育を続けてきたのですから。
4。ですから今の韓国に於ける北朝鮮問題の核心は統一方案の現実的発展的与論形成の為の対話展開と健全な韓米日安保体制の建て直しに関する国民的合意形成です。体制の共有よりも活命連帯により生命・生存・生活の質的高揚を確保する共同実践の仕組み作りではないかと思うのです。
・

山本恭司

北からの軍事力による統一は“費用”が膨大すぎて現実にはありえないことを前提として、では次に考え得るシナリオは何かというと、「韓米日安保体制の建て直しに関する国民的合意形成」であり、その原動力が活命連帯による生命・生存・生活の質的高揚を確保する共同実践であるという金泰昌先生のお考えに、私は全面的に賛成です。
その場合に、安保体制と経済体制（資本主義）の共通基盤の確認・再確立である、と。現在の北朝鮮について、小倉教授は「金正恩委員長は西洋民主主義をよく知っている人物であり、軍部を中心とする守旧派を粛正してきた『合理派』の統治者であることを、わたしたちはもっと理解した方がよい」と指摘されています。私もそう思います。今のアメリカは、国連を巻き込んでイラクに兵を送って新世界秩序の中心になろうとしてきた嘗てのアメリカとは違います。前大統領のトランプ氏は、結果として、戦争をしなかった戦後唯一の米大統領なのです。今のバイデン政権も、兵を世界から引き上げて自国の経済立て直しに専念する方向に梶を切っています。
そうすると、日米韓が軍事的経済的共通基盤を保持しながら北朝鮮と韓国の連携（更には統一）を推進する媒介役になれるのは隣国・日本のほかにありません。つまり、日本は米－日、韓－日、北－日の三本の輻（や）が集まる轂（こしき）になる。そのことによって米北韓日の車輪は回転し始めるのです。現代史の壮挙です。典拠は中国が生んだ『老子』です。三本の車軸を容れる日本は「無」すなわち「空」であることが肝要です。幸い、日本には戦争放棄の憲法 9 条があります。しかも憲法 9 条を日本にもたらしてくれたのはアメリカです。或る韓国の大学で、日本の憲法 9 条のことは一切言及されなかったということですが、今の日本が軍事的拡張主義（帝国主義）を策するということはあり得ないと思います。すなわち、

憲法で軍事行動が制約されている日本こそは、韓北米三国の間に立って、韓国と北朝鮮の和解（朝鮮戦争の終結）への道筋をつけていく上で最高の好位置にあります。そんな芸当が日本の政治家に出来るだろうか？　と思う人もあるかもしれませんが、この道が日本が生き残り、東アジアの安全を保証し、しかも東アジアが共々に経済発展を遂げられる最良の道であることは明白でしょう。このウルトラＣを成し遂げる、勇気と気骨と信念と智恵ある方をトップに推して、その首相を全国民が応援すればいいのです。まさに「空気感」の醸成です。紆余曲折はあるでしょう。しかし、天の時、地の利は熟しています。まずは韓国と日本のリーダーたちの活命連帯、相和前進ではないでしょうか。

金泰昌

随分気合いのこもった文章をよませて頂きまして山本さんの意気込みは十分理解出来ます。しかし今のところ少なくとも三つの問題があります。

1。日本の意志と能力と目的に関する信頼感-信頼性が北朝鮮は勿論韓国にもそしておそらくアメリカにも未だ確保されていないということです。

2。米北韓日の車輪の回転がうまくいくように中国とロシアが黙って見ているかということに対する合理的な予測とそれにもとずいた対策を立てようが未だ無いということです。

3。金正恩がスイス滞在中に自由と資本主義のことに認識と理解を深め合理的政治判断の基本は整っているという推測が果たしてどのくらいの信憑性があるかということです。日本留学したからと言って必ずしも日本の良さに関する合理的理解を持っているとは断言出来ないのではないでしょうか。そういう問題があるからこそ今後の韓日関係の成り行きがとても重要な試金石になるのではないかという気がします。

山本恭司

第七章「ニヒリズムの東アジアに未来はあるか」に移りたいと思います。「韓国が『動きすぎるから国家ではない』のであれば、日本は『動かなすぎるから国家ではない」というフレーズを興味深く読みました。

先ず韓国から。民衆の血と汗と涙で軍事政権を自壊させ民主主義を実現させました。国家国民を挙げて急速に経済発展を遂げ、政権交代とともに原発を公約通り停止させ、憲法の改正を日常的に実行してきた等々の能動性は目を見張るばかりです。「正しい」と思えば即実行する変革への柔軟な態度や国家の危機への集団的対応ぶりは、コロナ禍の日本政府の「動かなさすぎさ」と対照的です。そういうところを日本人は韓国から大いに学び、真似るべきだと思います。

ただ、韓国の若者が国家や社会に対して抱いている違和感の淵源を探っていくと、韓国は「道徳国家」であり「道義国家」であるという自己規定。それを日本との対比において「己高し、己善し」とする、思い込みの自己肯定が「反日愛国」というあだ花を咲かせています。「省みて他を言う」というところはないのでしょうか。「自分たち自身はどうだろうか？」という自己省察がどこまで働いているのだろうというのが今の日本人が韓国に抱いている違和感ではないかと思います。

次は日本です。日本人の動かなすぎるのは国家の体をなしていないと。例えば、外国から与えられた憲法なのに改正、創憲への動きが鈍い。戦争の悲惨と大敗戦の末に公布された日本

国憲法は、前文の「恒久の平和」への誓い（→第九条「戦争の放棄」）と第一章第一条「天皇」の象徴規定が日本人のＤＮＡにしみこんでいるがゆえに、憲法改正論議も動かないと私は見ています。敗戦の翌年の正月元旦に天皇が「人間宣言」したにもかかわらず天皇の地位が憲法で「人間」ではなく「象徴」となっているところに戦後日本の動かなさすぎる理由があるのです。いわば樽の栓が「象徴規定」です。天皇も皇室も、憲法上、法律上、平等で差別なき「人間」であることに妥当性があります。天皇家は日本の古代以来の神話の伝承者であり、受け継がれてきた儀式の執行を型通り後世に受け継いでいく。いわば天皇家が歴史的遺産として存在することを国民は誇りとし、静かに見守り、尊重していく、ということでいいのだと私は思います。天皇にも選挙権があり、人権（例えば名誉毀損行為に対する提訴権）も認め、また法律に悖る行為があれば平等に法の裁きを受ける。文字通り「人間」として、平等の地位に天皇にも就いていただくことが憲法改正の第一歩だと思います。樽の栓が抜ければ（象徴規定の廃止とそれに伴う関係法の整備）、日本はたちまち能動的な国家になります。

明治帝国憲法のように天皇を「国家元首」にという、世界の趨勢と真逆なアナクロニズムが、政権政党によって為されている奇景と、動かなさすぎる日本は、憲法第一条がもたらしているということを申し上げておきたいと思います。尚、憲法を改正して天皇を「国家元首」にすれば日本は滅びます。

金泰昌

第七章は６年前に韓国に戻ってからいろんな所でいろんな人から問いかけられた重要な問題の中で最も適切対応が困難であった難問に対する考え方を改める切っ掛けになりました。"これが国家か?" "国家とはこんなものか? " "韓国は地獄と思うか?"などなどの質問に接する度に一瞬困惑した経験があるからです。流石小倉教授のようにズバリ "韓国は国家ではなく運動団体"であるとは言えなかったけれど前国家段階とか国家構築最中とか地獄を人間の住み処に変えて行く途中であるとか工夫に工夫を重ねて来た苦渋の過程を敢えて反芻させられたと言えます。又わたくし自身が固定確定された国家像を持っていないので尚更確信をもって国家とはこういうものだと言い切れなかったこともあります。率直な言い方をすればわたくし自身は普段韓国籍の大阪住民+清州住民=1 国籍 2 住民という考え方が習慣化されているので固体相ではなく液体相、そして時々気体相としての国家像を持っているので困ることがあったからです。ですがムン政権下では大統領始め政府閣僚や与党の考え方がわたくし自身とはまったく違うベクトルからかなり流動化された国家像をもっばかりかそれを正当化しいるのでむしろ韓国は "運動団体"と見た方が実相に近いと言える処があります。

ムン政権の中枢には所謂反米親北運動圏出身者が圧倒的に多いという事実も韓国の運動団体的性格をよく現していると言えるでしょう。更に"動き過ぎる運動団体"というのもムン政権になってからより目立った特徴になりました。ムン大統領自身も北朝鮮に行って自己紹介を"南側の大統領"と位置付けすることによって国家元首ではなく南半分の団体の代表格におさめているのですからやはり国家というよりは運動団体の団長であることを自認しているようです。

韓国のナショナリズムに関する見方としてわたくし自身は "ハン"的なものと"ハーン(解恨消怨)的なものの二種類があって前者は前向きで明るくて未来共創的生動力を持っています

が後者は後ろ向きで暗くて怨念と復讐による破壊力として働く。ハンは生命の開新エネルギーであるのに反してハーンは被害の仕返しを図るネガティブエネルギーであります。東学も気学もハーン的ではなくハン的エネルギーとして働くことを切実に祈願するのです。

因みに一言いっておきますとハン的という場合その核心的な意味合いは新羅時代の大碩学崔致遠の接化群生です。出会いが相互の変化をもたらしそこから諸々の物事や人間を生かす力になるということです。東学もハンサルリム運動であり続けて欲しいのです。

第八章はジャーナリストの日韓論に対するものなので特に山本さんの深読みに期待するところがあります。

山本恭司

オール宗教専門紙の記者であった私は、仏教教団の訪韓団の一員として朴正熙大統領時代の韓国に行ったことがあります。夜間外出禁止令が出されていました。「反日の韓国」と言われていましたが、私は、韓国人の温かな雰囲気と礼儀正しい国民性が好きになりました。以来、発掘されたばかりの百済の古代遺跡を見たり、また日韓仏教学術交流団の同行記者の一人として韓国へ行きました。1980 年の全斗煥大統領就任から間もなくの頃にも学術会議取材のため訪れました。83 年のソ連による大韓航空機撃墜事件と重なる日に韓国に行ったのが記者時代最後の訪韓でした。行くたびごとに韓国は豊かになっていくのを目の当たりにしました。

私が新聞社を離れてからパスポートを取り直して韓国に行ったのは 2013 年秋です。約 30 年ぶりの韓国です。ハンサリム運動の取材を行いました。この運動は東学農民革命の思想を根幹として起こった文明大転換の運動です。万人に宿っている尊厳なる生命（＝天）に仕えて仕えて仕えきる「侍天主」という宗教的情操（霊性）を根幹とする活動です。この時韓国では朴槿惠大統領が国民の圧倒的・不動の支持を得ていました。ハンサリム運動に対する共感の輪が急速に広がっていく時期でもありました。ハンサリム運動の精神的支柱は「生命於天地間萬事不求清氣外」（天と地のあいだに生まれて万事を清浄な氣運以外では求めない」生活を生きた在野の哲人無為堂（ムイダン）・張壹淳（チャンイルスン、金芝河の師匠）であったという話も聞きました。「近代」の資本主義も共産主義も乗り越えて「生命」を活性化していこうという素晴らしい運動だったと思います。日本ではそういう性質の運動はまだ起こっていません。

韓国社会が急に暗くなるのは 2014 年春のセォル号沈没事故からです。国民の悲嘆が朴大統領の対応の遅れへの怒りとして爆発し、ロウソクデモへと拡大。朴大統領の度重なる釈明にもかかわらず、結局朴大統領は国会で弾劾されました。私が日本での報道を見た限りでいえば、朴大統領は懲役 24 年の判決を受けるような悪事を働いたのだろうかと思います。韓国の憲法や法律体系を知らない一日本人の、何のイデオロギー的背景もない率直な疑問だと思ってください。

その後の文在寅政権の露骨な反日政策を知れば知るほど朴槿惠前大統領への同情が私の中で膨らみました。女性大統領が国民を前にして何度も謝る姿をテレビで見て、まだ決定的な犯罪が明らかにされたわけでもないのに、一国の大統領が頭を下げる哀れさを感じざるをえません。私は韓国政治を取材したことはありません。だから、高名なジャーナリストの目から見ればお門違いな見方なのでしょうが、一日本人として素朴にそう思います。

戦後経済復興の下地を作った朴正熙大統領。母親と父親の暗殺の悲劇から立ち直って、彼女なりに祖国の発展のために懸命に尽くした人です。もう少し冷静に朴槿惠氏の業績を評価するべきだと思うのですが、違うでしょうか。感情の爆発は、正義ではありません。時の政権が「反日愛国」を口にした途端、まさに韓国を「国家」の体をみずからなさなくしてしまっていることに気づいて欲しいと思います。「ハーン」の韓国でははなく「ハン」の韓国と対話・共働・開新する「公共する哲学」を共に学び、活命連帯して未来を共創する日の来るのはまだまだ先かもしれませんが、私は、いつかハンサリム運動を起こした韓国民の生命力、人間尊厳への確信がこの国のオピニオンリーダーの主流となることを切望しています。韓日・日韓の志民が手を携えて未来共創に進む日の来ることを願っています。この章では小倉教授は込みいった議論はされていませんが、仕事飯を拒否して「不通」の悪名を得た朴槿惠氏が「カッコイイ女性」だった、「まさにそのとおりだった」と5年後には多くの韓国人がいうであろう、と書いておられます。そうあって欲しい、と私も思います。

・

金泰昌

第八章を読みながら特に注目したのは "断"という漢字から感じ取れる日韓関係像とそれと相関連動するジャーナリストたちの韓国観に関わることです。韓日関係とは基本的に "断と続"の弁証法的ジグザグのプロセスであって時と勢と場によって断絶が目立ったり継続が強調されたりする複雑系的な間柄であると見たほうがより現実的ではないでしょうか？　ただわたくし自身が今日の韓日関係が史上最悪だと感じるのはムン政権の中核にいる重要人物たちの言動とそれに同調する与論の動向がかって経験したことのない程度であるということです。"竹槍をもって親日勢力と闘い続けるべき"だとまで言われたことはなかったし日本に来るということがいかにも異常な常識離脱だという雰囲気というのも経験したことがありません。又いざ日本に来て何となく以前とは違う反韓嫌韓の空気がいろんな時処で感じられます。ムン政権のように確信的反日を全面的に打ち出し日本政府の対応も強固一辺倒であったことも記憶がありません。いつも相変わらず"近いけれどあまり親しいとは言いきれない"奇妙複雑"でありながらも完全に途切れれずに維持されてきたのです。わたくし自身は過剰な期待を持たずにただ尽人事待天命の心構えで韓日-日韓哲学対話を根気強く継続しているわけです。ドラマとか大衆歌謡とか飲食よりも哲学対話にかける思いが唯一の原動力になっています。

山本恭司

第九章は「よりよい日韓関係をいかく構築すべきか」です。「日本と韓国はともに、世界史のなかで中心的な存在となったことがない。この点が、中国やヨーロッパや米国との顕著な相違である」と小倉教授は指摘しています。日韓・韓日は、今後とも世界史の中心的な存在になることはあり得ないのでしょうか？　私はそうは思いません。なぜなら日本と韓国には世界の文明転換を主導しうる思想哲学がある（又は潜在している）と考えるからです。それが韓国（朝鮮半島）のハンであり、日本の大乗仏教、大乗儒教でなないでしょうか。古事記などの神話からも生命エネルギーが汲み取れます。「東学農民運動」が内包していた「ハン」の思想哲学はハーンに急降下してしまう要素も内包していますがハーンがハンに飛翔することも可能であるところに途轍もないダイナミズムが潜在しています。（天台）仏教では、人

の心は仏界から地獄界までの十界を内包しているとし、仏界に至ること（成仏）が究極の目標とされています。ハンと仏界との繋がりについては今後の研究課題でしょう。韓国市民の自力による民主化の達成は、東学的エネルギーの爆発とも言えると思います。ちなみに、日本の田中正造（師匠は新井奥邃）は東学運動を絶賛しました。
戦後日本のアカデミズムは、韓半島への植民地支配を自己批判し、反省を積み重ねてきました。その地道な積み重ねが政治にも反映され、歴代の首相が反省をくり返し表明し、慰安婦問題では朴槿惠大統領の時に日韓合意にまで至りました。ヨーロッパが過去の植民地支配による暴政に知らんぷりを決め込んできたことと並べてみますと、日韓両国民は、私たちの道徳的批判力と反省力にもっと自信をもってもいいと思います。それは韓半島と日本列島に受け継がれてきた文化力（共通しているのは儒教朱子学）の高さの証明でもあります。
なぜ今、日韓関係が悪化したのか。小倉教授は、「是々非々で韓国と日本の悪い点を公平に批判する」という、教授なりの「親韓の作法」を展開しています。先ず韓国への批判はこうです。歴史問題に起因するすべてのことを「日本のせい」だとして他者化し、「異論」を一切許さないという感情的態度は「思考停止」である、と。なぜなのかわかりませんが、韓国は日本に対しては、思考停止とともに父権的（パターナリスティック）な振る舞いが鼻につきます。日本はどうかというと、互いに異論を受け入れる柔軟さがあります。日本の市民社会には、自由な議論への開放的寛容さがあります。ただ、日本社会には「他者はどうせ他者である」、他者と自己とは関係ないという醒めた気分が漂っています。小倉教授は、そういう空気の充満を「民主主義の成熟ではなく、死への道である」と警鐘を鳴らしています。「日本社会はあきらかに生命力を喪いかけている」というのです。生命力の喪失は、思考停止よりも遙かに深刻である。このことを知らなければならないと思います。思考停止どころか、思考放棄です。日本社会は韓国社会の激しさ、そのダイナミズムを実践的に学ぶべきなのです。
歴史問題を巡って、日本には嫌韓本が山のように並んでいますが、日本人は足を踏まれた人の痛みに思いを致す「敏感（鋭敏）さ」が足りないと思います。鈍感なのです。特に保守の政治家がそうです。鈍感と過敏はコインの裏表です。過敏な拒絶反応ではなく、敏感な反省力と思考力を、日本の人文系知識人がどれだけ涵養してきたでしょうか。韓国を魅力的に描く「哲学」と「才能」こそが今求められている、と私も思います。
・

金泰昌

今から思い返せば 1989 年末の来日以来政治家や官僚による韓日関係健全化は色んな理由と思惑と立場が絡んで困難であると判断し一個人としてある程度自主的思考が可能だと思われる学者専門家、研究者たちと公共する哲学対話を通して韓国と日本とが善意の第三者の参加を得てまず現状認識を整えそこから互いに共有可能な関係像を持ち合えるようにしていくのが現実的で発展的ではないかと思ったのです。最初の段階はわたくし自身が客員研究者として所属していた東京大学法学部の同僚を中心に早稲田大学政経学部からの参加者を交えたかたちの勉強会から始まりその後ある企業の協賛による定期的会議に発展定着しました。なんと 18 年間継続しその成果は東大出版会から全部合わせて 30 冊の本が出ています。その後２０１６年から韓国のある新聞社の企画事業として東洋フォーラムを立ち上げ韓日関係の健全化をめざす多様な主題を基軸にした韓日両国の関心共有者を中心に中国からの参加者も交え

て自由活発な対話会議を開催しました。専ら市民主導の関係健全化を目的とする取り組みでありました。即効を期待せず誠意を込めてやれることからやり始めるという思い込みで進めたことです。あいにくコロナ事態悪化とムン政権の剥き出しの反日政策のダブルパンチで途中で中断せざるを得ませんでしたが幸いなことにその成果は 2 セット 7 巻の書籍として出版されました。そのような根気と執念の根底には古代韓国の哲学資源として重視する『三一神誥』の真理訓の最後に出てくる次のような文言があります。

哲 止感 調息 禁触 一意化行 返妄即真 発大神機 性通功完 是。

　参考にわたくし自身の新解釈を付けておきます。

哲学するとは先ず感情をおさえ(抑止）呼吸を調え 衝突を慎みハン心に化えて行うようになれば迷妄から返えり真実に即して大局的な気力を起こせば互いの徳性が通じ合って功用の完成に至る。

因みに一言。理想的人間像として儒教は聖人君子、仏教は覚者、道教は仙人、ハン思想は哲人とします。ですから哲とは哲人のなすこと。ここでは敢えて哲学することと意訳しました。

・

山本恭司

なるほど、哲学するということの究極の意味が古代韓国の「三一神誥」の真理訓の最後にこのように書かれているとは凄いと思います。この文言ひとつで『韓国は一個の哲学である』（小倉紀蔵著）ということがあらためて了解される思いです。ハン的霊性が伝わってきます。やはり韓国（韓半島）と日本列島は哲学・霊性・情操・未来共創の次元で共に互いに手を携えてやっていけるパートナーだと思いました。まず日韓・韓日で「理想の人間像」を共有共感共振しあって未来を開いてまいりましょう。ありがとうございました。

・

金泰昌

山本さんの未来共創への熱い思いを応援するという意味で二点申し上げます。先ず第一点は同じくハン思想の古典である『参ぜん（人偏に全）戒経』にある次の文言がわたくし自身の発想の根源です。

哲人 宜開 導後人（第一章 誠の導化）哲人は未来を宜しく開き後の人々に天地の真実を知らせる。未来宜開という考え方。

第二点は 『中庸』に出てくる次の言葉。

「継往聖 開来学。」過去の聖人たちの知恵を継承し未来の学びの道を開く。未来というのは新たに開くのであってあれこれ対策を講じることではないというのです。

だから未来共創の創は創造ではなく共働開新という意味合いがめだつ。という東アジアの古典から学ぶべきことがあります。

山本恭司

一章から九章までざっと対話をさせていただいて一つ言い残していることがあります。それは日本人と日本国憲法第九条についてです。たしかに「右翼」方面の「愛国者」の方々は九条改正を盛んに言い立ててきましたが、なぜ日本社会がやすやすと憲法改正に向かわないのか。このことを深く考えて見る必要があると私は思っています。団塊の世代の私は小学校４年生の時に、憲法九条の「戦争の放棄」がとても大事だという切々たるお話を担任から聞き、

「その通りだ」と納得して、以後変わっていません。洗脳でしょうか？　ＧＨＱの戦略にまんまと乗せられてしまったのでしょうか？
幸い、目下、国際法の大本締めである国連憲章は「集団的自衛権」を認めています。だから、第九条の下での集団的自衛権の解釈を最大限広げた日本の安保法はそれでいいのではないかと思います。日本（対米）属国論、植民地論がありますが、この１、２年だけでも状況はどんどん変わりつつあると私は見ています。アメリカ自身、底流は、常時対外戦争のお国柄から自国（内政）第一の国柄へと、正常化しつつあるのです。米中ロの三大超大国同士が戦争することはまずないというのが専門家のほぼ一致した見解ですが、私もその通りだと思います。大国同士の戦争になれば、世界が核で滅茶苦茶になるのが明らかだからです。終末戦争を望むグループがいるのかもしれませんが、そういうグループの画策があるとしたところが彼等の退潮傾向は変わらないと見ます。
大東亜戦争で内外のおびただしい人々を死に追いやった戦争の悲惨さを味わい尽くした日本の民のほとんどは憲法第九条を歓迎したのです。一部原理主義的戦争推進派のノスタルジアが今の天皇国家元首論になっていますが、九条問題自体は集団的自衛権の法の成立によって決着が付いたと思います。日本政府が韓国や北朝鮮を武力攻撃することはないし、日本と韓国が戦争するようなことは絶対にあってはならないという小倉教授の熱願に私も強く強く共感します。
人類の良心は、ラッセル・アインシュタイン宣言にあらわれています。以下一部を引用。「私たち(宣言署名者)は、人類として、人類に向かって訴える― あなたがたの人間性を思い出し、そしてその他のことを忘れなさい、と。もしそれができるならば、道は新しい楽園へむかって開けている。もしできないならば、あなたがたのまえには全面的な死（全体的破滅）の危険が横たわっている」。同宣言は、ビキニ環礁での超水素爆弾の威力に驚愕した科学者と哲学者が、人類が生き残る道は、人類が「戦争の放棄」の方向に向かうしかないことを示唆しています。「戦争放棄」を他のどの国にも先駆けて憲法に盛り込んだ日本は、戦後７０数年間、一度も戦場での殺戮行為を行っていません。私はそのことを自慢したいのではありません。究極兵器が世界戦争で炸裂したら北半球を壊滅させることが明白であるからには、人類に叡智があるならば、世界の世論を「戦争放棄」の方向に導くことが最上喫緊の国際的議論になるべきだというのが私の考えです。夢のように思われるかもしれませんが、対話・共働・開新はその夢を現実に変える哲学の道なのです。
江戸時代に武士道を選んだ日本人は本来、好戦的な国民なのでしょうか？　であれば、なぜ江戸時代２７０年もの間、大きな内戦が起こることもなく、民はこぞって神仏を大切にし、犯罪のほとんど無い国土を維持しえたのでしょうか。本来、日本人は平和と人間愛を大切にする人々が多いと思います。近代に入って「戦争」という装置に組み込まれてアジアをはじめ他国にさんざん迷惑をかけましたが、実は日本の民のメンタリティは「戦争放棄」「恒久平和」がしっくりきているのです。そういう日本人の本来的な性向を韓国の人たちに理解納得していただければ、また私たちが理解納得してもらうための努力をしていけば、韓半島と日本とは「近くて近い」友好関係になるでしょう。以上補足をさせていただきました。

金泰昌
韓日両国の相和と相生と共福への熱い思いを体感しつつ山本さんと一緒に小倉教授の本を読

むのが大きな楽しみでありました。ここで二点だけ読み終えた感想を述べさせて頂きます。
先ず一点。北朝鮮の主体思想に関することです。25 年程前のハンガリーのブダペストで 開催された世界未来研究協議会主催の国際会議で出合った北朝鮮側参加者の中に主体思想研究所副所長始め三名がいまして主催者の好意により日本側の一員として顔合わせをしたことがあります。その時当時 ICU の斎藤美智子教授の仲介でわたくし自身と副所長との間に会話が交わされました。当時別のことがあって朝鮮大学校社会科学研究所監修『ちゅちぇ（主体）思想叢書』（全 15 巻）の中の三巻、そして特に金哲央著『主体思想概論』（未来社 1992）を読み終えたあとでしたので感想を聞きたいという要望に答えて言ったことが思いうかびます。
1。全ての物事に対する一筋の正答が一人の人間（金正日書記）の教示によって正当化されているところが哲学と言うよりは宗教のように感じられる。
2。個人の生命よりは集団の生命を優先させるところが宇宙生命-地球環境生命-個体生命の相関連動としての（わたくし自身の）生命観とうまく合わない。
3。よく読んでみると良いもののより集めの気がして朝鮮的な独自性が感じられない。
ほぼそういうことを言った覚えがあります。そのあと近いうちに北朝鮮で会いたいと言って別れたけれど連絡なし。何故今になってこの話をするかというと小倉教授の本のなかに韓国人が主体思想のことで北朝鮮に対して負い目のような感じを持っているという言及があったことが気掛かりになったからです。人によっては宗教的なものに惹かれることもあるでしょうが国家宗教そっくりの主体思想に魅力どころか深い違和感を感じるわたくし自身が例外だとは思わないからです。
2。大きな集まりでの発言だけが目立ちますが小さい集会での地味な話し合いの真摯な取り組みと持続的なふれあいの方にも関心と激励を配る必要があるということです。
よりよき韓日・日韓関係改善の問題はわたくし自身の観点と立場と願望からすれば正に開新実学的想像力を原動力に展開する未来共創実践学的緊急課題であります。

山本恭司
ありがとうございました。

（読後感その１）

小倉紀蔵著『韓国の行動原理』を読んで

鈴鹿医療科学大学講師
大橋　健二

Ⅰ．前著『群島の文明と大陸の文明』（ＰＨＰ新書、2020 年）と同様、韓国を中心にしながらも日韓という「周辺文明」国同士という「水平的」な比較を軸に、韓国と日韓関係にかかわ

る鋭い現状分析・考察・提言があり、大きな知的刺戟を受けました。日韓関係を考える上で、こうした分野における最良の本であると思います。現代日本人の多く、少なくとも私を含む中高年世代以上の日本人は、児童・生徒・学生の全時代を通して現代史、とくに第 2 次世界大戦／太平洋戦争に至る歴史学習が決定的に欠けており、なかでも韓国と中国両国に対して行った非道・非正義の過ちに対しては大半が無知・無関心で、過去－現在における両国民の精神的な痛みを理解できず、これを過小評価している傾向が見られます。
中高年世代や会社を定年退職した男たちには、仕事に関係する話か愚痴、あるいは人間関係における噂話にしか興味がなく、共通の話題として盛り上がるものの一つに、日本バンザイと一体化した「嫌韓」「反中」があります。正確な知識がなくても、韓国と中国の悪口だけは誰もが言えるからです。韓国や中国を非難することで日頃の鬱憤やストレスを存分に晴らすことができます。こうした日本の多くの男たちのためにも、また現在日本の書店にはいわゆる「嫌韓」本・「反中」本が溢れんばかりに並び置かれている醜悪な惨状を見るにつけても、鋭い分析と考察に満ちた、この優れた本が幅広い世代に、できるかぎり多くの日本人に読まれることを心から願ってやみません。

Ⅱ．国家の間違いを個人の立場から正すという韓国人の儒教的な「士大夫メンタリティ」に対し、日本人には国家・社会の体制・あり方全体を動かしてやろうという「士大夫的な志向性」が欠如しているとの指摘をたいへん面白く読みました。日本人は、いわば「鼓腹撃壌の民」であって、とりわけ政治的なことはすべて「お上」に任せれば良いという伝統的意識から今でも抜け出せません。これに加え戦後日本では特にその傾向が強いのだと思いますが、政治への不信感、さらに政治家への嫌悪感や忌避感というのが普通の市民の間には根強く存在していると感じています。わたしは 20 代のころ、大学で学んだ政治学を実践の場で試すべく政治家になろうと関東地方で地元代議士の秘書（末端の使い走り）となり、選挙活動／後援会作りの一端を担ったことがあります。その時強烈に感じたのが、共産党系や労働団体などの一部関係者を除き、地元のいわゆる良識的な、優れた人たちほど、選挙や政治と距離を置きたがるということでした。日本ほど政治家が馬鹿にされている国家はないと石原慎太郎が言っていましたが、真実であると思います。韓国の「社会の総士大夫化」の是非は別にして、わたしは日本人にはもっと「士大夫メンタリティ」「士大夫的な志向性」を持ってほしいという気がします。社会的矛盾への批判が国家や為政者すなわち責任ある「強者」に向かうのではなく、ホームレスや生活保護者、日雇い労働者・非正規社員や低賃金で使われることの多い非欧米系在日外国人など非力な「弱者」に向けられるという倒錯が広く世間一般を覆っているからです。こうした現状を見るにつけ、正しい意味での「士大夫的メンタリティ」「士大夫的な志向性」を今日の日本人こそ持つべきです。

Ⅲ．儒教の特長は、利（実利／現実的合理性）と義（正義／道徳主義・理想主義）の合一を目指す――2021 年ＮＨＫ大河ドラマの主人公で儒教道徳の信奉者、渋沢栄一は「義利合一」説を主張したことで有名――ところにありますが、現代韓国では利と義が分断され、利に対する義の過剰重視ということが語られています。第五章でも韓国と同じく、大義（義）に偏重し国益（利）を考慮しない、戦後日本人の「きれいごと絶対主義」が批判の

俎上にあげられています。これで思い出したのが、半世紀前の学生時代に愛読した国際政治に関する一冊の本です。それは戦後日本の平和主義のあり方、とくに日本の「60 年安保」で絶頂期を迎えた理想主義的平和論に対し敢然と異を唱えた本でした。当時最高の知性の一人、永井陽之助（1924－2008、東京工業大学教授）の名著『平和の代償』（1967 年）で、現実主義・政治的リアリズムの立場から理念的な「正義」より現実的な「平和」（＝実利）を模索し志向すべしと主張したのです。彼我の主張の是非／瑕疵を、盲信的な「正義」（と思い込んだもの）を大上段に振りかざして他を裁断することに努め国益／実利を大きく損なう「嫌韓」「反中」を高唱して日本バンザイの心地よさに沈み込もうとするわれわれ世代の、日本の多くの男たちにとって小倉さんの本は反省／警醒の書であることは疑いを入れません。

Ⅳ．韓国の「過剰な政治志向」と同様に「道徳志向性国家」化が、本来「非政治志向」であったはずの現代日本で近年、とくに韓国と中国への愚かで悪辣な批判が保守層・「右」界隈の人たちによって全面展開され今日に至っています。悪しき意味においてですが、「日本の政治化」「日本の東アジア化」が急速に強まってきたというのは、その通りです。安倍晋三首相が自らその先頭に立ってこうした人々を煽っていました。日本の総理大臣もここまで落ちぶれ、幼児化してしまったかと愕然とし、彼こそが、あの無様で陋劣な戦いに終始した太平洋戦争の「敗戦」を「終戦」といって誤魔化した戦後日本の、経済成長に脇目も振らず邁進した日本社会の総決算、その体現者であると天を仰ぎました。安倍とそのシンパに共通する中国・韓国・北朝鮮に対する「アンチ」の言説の、その多くが愚かさと無知、傲慢さに由来するものであり、日本人として恥ずかしく思います。しかし、時間をかけ条理を尽くして説けば、理解してくれるだけの良識を持ち合わせている人が日本人の大半だと信じます。現代日本人の多くは東アジアに対しては観光やサブカルチャー的な知識だけにとどまり、思想・哲学・文化に対する知識・関心度合いが圧倒的に不足しています。これをどのように埋めていくかということが、日韓双方においてこれからさらに問われていくことになるでしょう。

Ⅴ．憲法第九条の存在を知らない韓国人が多いという第五章の指摘には、驚くとともに少なからぬショックを受けました。世界的に広く認知されているとばかり素朴に考えていたからです。わたしは無責任に聞こえるかも知れませんが、憲法九条は改正してもいいし、しなくても別にかまわないという立場です。年間予算 5 兆円を超え戦車・戦闘機・潜水艦・ミサイルを有する自衛隊を「戦力」＝軍隊でないという理屈には無理があります。自衛隊の解消か憲法の文言を変えるかのいずれかです。ただし、「右」に偏重した現在の自民党政権下での憲法改正には絶対反対です。嫌韓・反中を唱えてやまない声の大きな「右」の人たちが大挙し、許しがたい欺瞞や過大な誇張で改正肯定論が展開されるに決まっているからです。嘘や煽動によって憲法を変えるべきではありません。一方、高度な政治的狡智（プラトンの言う「高貴な嘘 gennaion pseudos」）として現状維持を大前提に自衛隊の存在を認めた上でなら、九条改正をしなくても個人的にはかまわないと思っています。東アジアに軍事的空間が生じることは、アジア世界のみならず世界全体の軍事バランスを大きく損ね最悪の結果を招く恐れを否定できないからです。それは政治的リアリズムを欠く行為です。

柄谷行人は、第九条を無意識に根ざした日本人固有の「文化」であるとして「日本人の超自我は、戦争の後、憲法９条として形成された」と「九条＝日本人の無意識」論を楯に憲法改正反対論を展開しました（『憲法の無意識』岩波新書、2016 年）。古来、日本文化の深部・武道の極意に、受動に徹底し一切抵抗しないという大力量を持つ者のみに可能な「絶対受動」――鈴木大拙は『禅と日本文化』『続禅と日本文化』で言及／親友の西田幾多郎は「場所的論理と宗教的世界観」で「絶対的受働（ママ）」と表現――という独特の構えがあります。九条の「絶対平和」は「絶対受動」の政治版と言えます。地震・台風・津波・豪雨・豪雪・山崩れといった自然災害列島に生きる日本人は巨大な自然の力に対しては「絶対受動」で応ずるしかないという土着的な民族感情があるのは確かで、九条「絶対平和」主義を、政治的無能や知的怠慢、あるいは「愚者の楽園」「リアリズムの欠如」と批判するのは簡単ですが、このように切り捨てるのはすこし勿体ないように思います。

Ⅵ. 現代の政治的リアリズムの立場から言えば、日本が米国の核の傘に入る対米従属体制はやむをえないと理解できます。しかし長期的に見れば、これでは政治的オプションがごくごく狭小なまでに限定されるため、戦後日本の一貫した基本戦略たる親米一極体制に固執する愚は避け、小倉さんが強調するように日韓という新たな軸を立てる必要があります。当面日米関係の継続は不可避ですが、米国との信頼関係を保ちながら、いずれは日韓を基軸にした外交・世界戦略でポストコロナ世界の新たな秩序作りに貢献すべきです。今後一層の軋轢が予想される米国と中国という超大国・大文明同士の対決に際し、米中双方の文明／文化を深い次元で共有／享受している日韓両国こそ、調停役という重責を担える存在であり、かつこれを担う責務があります。

Ⅶ. 近年、日韓両国が「急速に幼児化」した――なんでもかんでも他国／他者のせいにして、アイツがすべて悪いのだと言い募るようになったこと――との指摘には、日本に関するかぎりまったく同意見です。現代日本の政界のトップが幼児化を体現した人たちで占められているようになったのは、戦後日本が一途に邁進した「経済発展至上主義」に伴う思考停止のままに生きてきて、小倉さんの言う「生そのものを生きる」という哲学の不在に由来するのでしょう。われわれ世代のおじさん・おばさんたちが政権寄りの発言をする若者を「ナチ」とか「アベ（安倍晋三）」とか言って批判し恐喝するとの指摘には、思わず笑ってしまいました。わが身に照らせば笑ってばかりいられません。わたしの場合、「ナチ」はともかく「アベ」に関してはまさにその通りで、自戒すべきことです。

Ⅷ. 日韓関係が「史上最悪」ということがあらゆるメディアをはじめ、各方面で語られるようになりましたが、過度に強調されすぎている気がします。保守層や「右」界隈の、いわゆる「愛国ビジネス」のおこぼれにあずかる周辺者たちの最大の食い扶持、メシのタネが「嫌韓」であり「反中」がこれに続き、かれらがことさらこれを煽り立てていることが原因のひとつに上げられます。韓国政府が、事実と言うよりも政治的意図に基づいて過剰な反日的言動を繰り返しいるのですが、日本政府は一々これに反応することをせず、素知らぬ顔であえて知らんぷりをするという器量を示してみせることも政治的英知にほかなりません。ニーチ

ェは高貴性を示す指標として「刺激に直ちに反応しないでいられる能力」「刺激に対し緩慢に反応する能力」（『偶像の黄昏』・『この人を見よ』という態度を上げていますが、対韓国政府に関する限り、日本政府もこれに倣うべきです。今日、日本政府のとるべき態度は、極端な政治的対立をできるだけ回避し、政治の分野以外の、とくに市民レベル／文化レベルでの協力・交流を援助し推進を図っていくということだと思います。日本と韓国・中国の分断／相互嫌悪感は、明治維新・明治政府に由来します。東北・福島で生まれ伊達藩士を先祖にもつわたしは、心情的にも薩長維新派と対決した奥羽越列藩同盟側に与し、薩長の狡猾さや傲慢さもあり、彼らによって主導された明治維新・明治政府をそれほど高く評価していません。左右両翼の学者・知識人らの大多数によって過大に評価されたその延長線上に日本と韓国・中国の軋轢が生じています。客観的事実に基づく明治以来の日本政治の再検証が、今後の日本のみならず東アジア世界にとっても必要です。

Ⅸ．多様な「異論」を排除し日韓ともに「思考停止」に陥ってしまった結果、互いに「嫌韓」「反日」を唱えてやまない現状への深い歎きが本書に見てとることができます。一方で、日本が戦後、欧米先進国では問題とされなかった「併合植民地支配問題」や「戦時女性の性暴力問題」といった問題について「世界に先駆けて」真摯に向き合い、積極的に取り組んできたことを「世界ではじめての快挙だ」と評価・指摘したところに本書の大きな価値があります。ここに日本は自信を持ち、同時に韓国はこうした日本側の姿勢を知り理解することが必要なのだという視点はじつに新鮮です。ここに日韓両国が互いに信頼し得る、新たな「対話」が始まるのではないでしょうか。

Ｘ．小倉さんの著作にはいつも啓蒙／啓発されるところがはなはだ多く、その都度自らの非才・浅学を恥ずかしく感じています。ただつまらないことですが、一つだけ気になったことがあります。韓国は法よりも道徳にこだわる国であるのに対し、日本は道徳よりも法を上位に置き、前者が儒教的伝統のなかで「道徳」をもっとも重要だと考えるのに対し、後者がアンチ儒教的伝統によって「法」をもっとも重要視する国とされていることです（第一章・第二章）。韓国はそうだとしても、日本は必ずしも「法」第一主義国家とは言い切れないのではないでしょうか。
室町時代から江戸時代の封建体制下、農村において農民が自分たちの代表である「庄屋・名主・肝煎」等を通して決めた「掟」すなわち「法」を遵守することを金科玉条のように考える傾向が日本人には見られるとの指摘（第二章）は、その通りなのかもしれません。古来より生殺与奪の権をもつ恐るべきものとして「地震・雷・火事・親父」という言い方があります。前三者が人知を超えた不可抗力のものであるのに対し「親父」だけが人間です。その意味するのは父親ではなく「大山嵐（おおやまじ）」「大風（おおやじ）」と呼ばれていた台風を指すというのが通説です。中世以来農村地域での自治のなか、裁判権（掟破りに対する生殺与奪の権）も認められていた「庄屋・名主・肝煎」という「親父」たちがそれであるという少数意見もあります。個人的にはこちらが正しいと思っています。村落の「掟」＝「法」を執行し死刑を宣告することもできた「親父」が「地震・雷・火事」の脅威と等しい程度に恐れられていたという点では、日本人は「法」＝「掟」を極力遵守しようとする国民であるということも言えます。
他方、拙宅の貧弱な床の間につねに掛けているのは、地元・三重県を選挙区とした「憲政の

神様」、咢堂尾崎行雄の筆による「非理法権天」の書軸です。この語の出所は楠木正成の旗印とか色々と言われているのですが、非（非道）は理（道理）に負け、理は法（法令）に負け、法は権（権力）に勝つことができないが、天（お天道様）には権力者といえども太刀打ちできないという近世法概念を示す言葉として知られています。非は「非道」で論外ですが、理・法・権は「地道」として事実関係の論理であるのに対し、天は「天道」として理念的・概念的な論理で儒教的です。お天道様としての「天」は、言い換えるなら神仏、神の摂理、あるいは「人外の理法」というべき大道徳を指します。「誰が見てなくても、お天道様がきっと見ているからそんなことをしてはダメだよ」という具合に使われてきました。いわゆる「アベ」＝安倍晋三・前首相が一部の国民から蛇蝎の如く嫌われ軽蔑の対象とされているのは、首相時代に国権の最高機関である国会で平然とあきらかな嘘を、煩悩の数より 10 も多い「118 回」もつき続け、それを公的に指摘されても、現在に至るまで恬として恥じることがないという不徳さにあります。「法」をうまく誤魔化すことができても、「天」を欺くことはできないと少なからぬ国民は信じています。韓国人と同様に日本人もまた、程度の差こそあれ、道徳的な国民だと言えるのではないでしょうか。今日の日韓対立を、道徳的な視点から再考することも必要な気もします。ともあれ本書で注目すべきは、小倉さんが「おわりに」で述べているように、互いに背き合いながらもきわめて親しい関係にある先進国、日韓両国の文明的な使命を「人類全体の幸福を増すための文化パラダイム」を協働構築することにあると断じたことです。ここに日本の未来が開けてくるような明るい希望が感じられると同時に、日韓両国のあるべき理想を見た思いがしました。小倉さんが本質的にもつ儒教的な「士大夫メンタリティ」「士大夫的な志向性」があらわれていると言えます。

（読後感その２）

小倉紀蔵著『韓国の行動原理』を読んで

四日市大学名誉教授
北島　義信

Ⅰ．小倉教授の『韓国の行動原理』を読ませていただき、韓国の市民の淵源は儒教的な「士大夫」にあるというご指摘はとても納得がいきました。「士大夫」層こそが王の政治に対してそれを批判し、正すことができる最大の勢力であり、今日の韓国市民を「社会の総士大夫化」だと捉える小倉教授のご指摘は、「国家の相対化」を可能ならしめることに繋がります。このような「士大夫」的思想が広く市民化するためには、崔済愚の東学運動が必須の条件であったのではないかと私は考えます。

日韓における市民の相異点について、日本の市民の淵源は、室町時代から江戸時代の封建体制の下で形成された農民の自己統治としての「自治」を小倉教授はあげておられます。それが「法の遵守」を生み出し、反権力の志向性の弱さの淵源となることになります。こ

の傾向は確かに認められるものです。さらに、それに加えて、日本の「市民」における「反権力の志向性の弱さ」は、欧米型近代をモデルにした「天皇制国民国家」にも起因するのではないかと私は思うのです。明治期に形成された「天皇制国民国家」は、それ自体が批判を許さぬ「神的存在」であり、国民は「天皇教徒」となったのです。そして、その教えと実践を命じる「法律」に従わぬ者は、合法的に「殺される」ことに繋がりました。その恐怖心と「宗教心」が「法の遵守」につながった点も多くあると思います。そのような意識は、今日においても十分に払拭されていないのではないかと考えるのですが、いかがでしょうか。

Ⅱ．第三章を読んで、「内発的発展の道はありえたか」という問いは、とても重要な問題をはらんでいると受け止めました。小倉教授は、従来の「マルクス主義的図式」では「東学から近代がそのまま出てくるという説明にはならない」と主張されます。私は小倉教授の考え方に基本的には賛成です。小倉先生の主張から私が感じたのは、何を以て「近代」だと捉えるかの考えを深める必要性です。南アフリカのアパルトヘイト撤廃と相生社会の基礎づくりは、「修復的司法」に依拠したものであり、「欧米型近代」とは異なった方向性をもっています。同様な問題提起を東学運動は行ったのではないかと思うのです。「内発的近代化という困難なテーマ」の内容深化に、今こそ日韓市民が力を合わせて取り組むべき時ではないでしょうか。この取り組みが、金泰昌先生が申される、「反」ではなく“ハン”の哲学・思想・宗教を復権させることに繋がるのではないかと思うのです。

Ⅲ．私も、現代の日本人にとって必要なことは、山本先生の申される「知韓開新」であるという考え方に賛成です。山本先生がおっしゃるように、我々が過去を解明するのは、互いに相手を尊敬することを学ぶためだと思います。単なる日韓の相違点だけの強調に終わるのではなく、金泰昌先生、山本先生が申される「接化群生」の「ギアーが噛み合う」ようにすることが我々日本人には必要だと思います。互いが尊敬し合う東学の「接」という組織の基底にあるのは、「接化群生」だと思いますし、それは南アフリカの「ウブントゥ」思想や日本の 15 世紀中期に形成された浄土真宗の「惣村」や「寺内町」の組織論とも共通します。「接化群生」とは、仏教徒の私にとっては、人々が互いに接し、対話することによって、学び合い、よりよくなり、生きる力が湧いてくることが込められた言葉であると感じられ、誰にでもそれはできることだと思います。したがって、日韓相互の「ギアーが噛み合うこと」は可能なのです。

Ⅳ．小倉教授は、第九章「よりよい日韓関係をいかに構築すべきか」の部分で、問われているのは、「韓国に関して事実を収集・蓄積し、さらにその事実の深層にある文化・思想を総体的に体認し、それを魅力的なかたちで世界に提示すること。このことができてないわれわれ自身の問題」だという指摘は、問題の本質をついているように思います。アフリカ文学・思想の研究者である私にも、納得がいく言葉です。1980 年代に、「飢餓」問題と関わって、アフリカ文学は確かに脚光を浴びましたが、いまはあまり取り上げられません。結局、多くの研究者は、アフリカの思想・文化の根底にあるものを現代のわれわれの課題と繋ぐことができなかったのです。アフリカの思想・文化の根底にあるものは、非常に深い哲学・宗教性

をもっており、誰の心も揺さぶられる魅力的なものです。私は最近、崔済愚の著書をじっくり読んでみましたが、それと共通する深い感動を感じずにはおれません。数年前にみた韓国映画『帰郷（魂の帰郷）』に描かれた、土着的宗教の果たす「赦し」のもつ深い現代的意味にも感動しました。その意味でも、山本先生も強調されているように、「韓国を魅力的に描く『哲学』と『才能』」が、今、求められているのだと私も思います。